

ほっとらいん
ふろむ
ほんごう

娘が撮った「認知症の母」の人气動画が劇場版に 映画『毎日がアルツハイマー』上映始まる



『毎日がアルツハイマー』より
©2012 NY GALS FILMS

映画監督の関口祐加さん（写真上）による長編動画『毎日がアルツハイマー』が、7月から公開されている。

それに先立ち去る5月、完成記念試写会があると聞き、会場にいそいそと出かけていった。というのもこのドキュメンタリー、待ちに待った一作だったのだ。去年だったと思うが、偶然、NHKの朝の情報番組で、関口監督撮影の動画を見た。アルツハイマー病と診断された母親の、ちょっと困ったことも起きる毎日を淡々と撮っているのだが、それがなんともしリアルながらハートフル。これをきっかけに動画（YouTubeで配信中）を見たのだが、これがはまり出すと止まらない。人様のお宅の日常なのだが、お母さんどうしたかな、元氣かなと、次のアップ

が待ち遠しい気分になってしまふのだ。実際、この動画は認知症介護に悩む人や医療従事者など多く人の共感を呼び、累計の視聴数はなんと20万20万回にもなるのだそう。

たとえば2009年、79歳の誕生日。娘と孫たち（監督の姪）に囲まれ、大好きなケーキのローソクをふっと吹き消し、お母さんはニコニコと上機嫌（写真上）。しかし、楽しい出来事も晩には忘れかけ、数日後にはすっかり記憶の彼方へ。娘の関口さんにはケーキの話を持ち出されると、「え？ そんなことあった？」とお母さん。一瞬へこんだかと思いきや、「ボケたし、ボケくたし」と歌い出し、明るく切り返して見事に一本勝ち。

ときには、カメラを回し続ける無粋な娘に「失礼だね」と憤る。当たり前の憤りだ。プライバシー問題も考えると、撮影自体の善し悪しにも感想はおよぶ。しかし、あらためて今回、長編動画として完成した作品を見ると、そこには「撮られたお母さん」ではなく、「撮らせてやっただお母さん」がいて、「役者が一枚上」とはこのことだと思った。

老いても、病んでも、親は親。親孝行ならぬ、子孝行映像がしかと流れていたのだ。それは、関口監督の実感とも重なるの

だと、ご本人の話から知った。

試写会が終わった後、監督と元NHK「福祉ネットワーク」キャスターの町永俊雄さんによるトークがあったのだが、町永さんに母親を撮った理由を聞かれて、監督はこう答えている。

「私は認知症になった母が好きなんです。つまり、アルツハイマーになる前の母で、すごく真面目でかたくて口うるさくて、いつも怒られてきたんです。でも、アルツハイマーになってからは、すごく性格がさばけて、いいなと思って。ドキュメンタリーの監督って、いつも魅力的な被写体を探しているんだと思うんです。灯台下暗しだったんですけど、ここにすごい被写体がいるみたいな、そういうノリでした」

「母を見ていてつくづく感じたのは、アルツハイマーになったからといって、人生不幸せなんだろうか、ということ。もうひとつは、アルツハイマーじゃないからといって、人生幸せなんだろうか。と、人生について深く考えさせられましたね」

つい先日のことだが、取材して上梓した小規模多機能型居宅介護の本について話す機会があり、とある勉強会に参加した。小規模多機能は主に認知症の方々の在宅支援をする介護サービスだ。そのとき『毎日がアルツハイマー』の話を少しだけした。すると、一人の女性が涙を浮かべて「遠くでひとり暮らしをしている母が最近認知症になったみたいで、おか



試写会にて、関口監督

しなことが続くんです。母が母でなくなってしまうみたいで……。病院に連れていったほうがいいと思うのですが、何科がいいのか。自覚のない母をどうやって病院へ連れ出したらいいのか。この先のことが不安で……」と、心中を一気に吐露された。

とても短い時間だったが、思いつくかぎりのことを伝えた。チラシを配ったところからの小さな出会いだったが、こういう思いをいま抱えている人たちに、関口さん母娘のドキュメンタリーが届いたらいいなと、あらためて思った。

主筆 亜理子（フリーライター・介護福祉士）

長編動画「毎日がアルツハイマー」
公開情報

2012年7月14日より
ボレボレ東中野、銀座シネパトス、
横浜ニューテアトルにて夏休み
モーニング・ロードショー
公式サイト：<http://www.maiaru.com/>